ちちのみの

佐々木鏡子
（秋田）

たれかれの享年おもふ秋の夜半もう寝なさいとこほろぎが言ふ
ちちのみの父は百六去年から施設にゐます杖不用です
「おお倅」弟に言ひしと手を挙げて先づは安心コロナ禍つづく
火のついたやうに泣いたと母言ひぬ復員の父に人見知りして
自らが釣りし小鮒を空揚げしたれをからめて食べさせくれぬ
事毎に「女のくせに」といふ父に口きかざりき思春期のころ
菊ちやんと母は呼ばれき伯母たちに生まれしは秋逝きたるも秋
再婚の父の許から逃れむと婚を早めしわれかもしれぬ
初まごの長女に父は持参せりピンクレディーのレコードアルバム
今ごろは庭に咲いてゐるはずだつたコスモスはみな暑さに枯れぬ
秋めきて茄子にふたたび花が咲くたつた一輪いろあざやかに
裃で神輿につきし父老いて今それを着るすゑのおとうと
百歳の父をことほぎ茶を点てし弟の妻なり所作うるはしく
これの世の奇しきえにしを思ひみる八十年の父、二十年の母
秋の日にアスパラガスの朱の実映ゆ百六歳の父の安穏

このごろの私

〈微助っ人〉をしています。九十代の樋口恵子氏がテレビで言っていました。転勤して、とみに忙しくなった娘のために少しだけ。立ち寄ると留守番の犬は大喜びです。娘はたまにありがとうと言います。

歩　く

宮本　君子
（広島）

このごろの私

今年は町内会の班長役が廻って来ている。今日は早朝から引潮の河口に降り立ち、川掃除。川に入るなど何年ぶりだろう。自宅の草抜きは怠りながら、皆でする公園の草刈は楽しい、と思うこの頃だ。

秋の野をゆつくり走る芸備線ジーゼル列車にこころほどける
やまんばがおいでおいでと手をふるか荒れ田になびく銀の穂すすき
こんどこそ読み通したい源氏本ひざにひろげてまたうたたねす
絵巻には紫雲黒雲たなびきてひとのこころを隠し、あらはす
若き日に喧嘩別れをしたる人ゆめにあらはれまたもあらそふ
わた雲の奥に放らんこのごろの得体のしれぬいぢわるごころ
水引の花がゆれをり無人駅のそばの小流れ覆ひつくして
ペットボトルをいつも代はりて開けくれるわが少年のふつくらな指
父母の墓ともに洗はん約束をふたりの姉とメールで交す
山並みは霧に消えつつ盆地なるふるさと三次の秋は深まる
きらきらとゆらめきひかる蜘蛛の巣の向かうに透ける冬のはじまり
歩くこと億劫がる夫はげましてけふも往復コンビニまでを
ふいにわれ迷子になりたる思ひ湧く気力うせゆく夫の手をとり
遠いむかしの民話のやうに夕光（ゆふかげ）のなかにひとすぢけむりが立ちぬ
冬過ぎて春の比婆山連峰へもいちど登る夢あり、歩く